

【ねがいましては】

第95号

平成9年5月26日

共和珠算学習塾

「くらし」

小学生の頃の私は、学校から帰るとまずランドセルを置くと「宿題はあとで」はあたりまえ、そのまま友だちのところへまっしぐら・・・「〇〇くん」と声をかけると、「はーあーい」と返事が聞こえ、遊びに夢中になりました。もしくはその逆もあり、今か今かと呼びに来るのをワクワクしながら待ちました。または公園へ出かけ、〇〇くん早く来ないかな・・・。とにかく放課後という時間は「ワクワク」の時間でした。これをお読みいただいているお父さんやお母さんはいかがだったのでしょうか。私の幼少時の放課後は、もうひとつの一日の中の「ドラマ・くらし」がありました。放課後は自由の代名詞でした。夕飯までの時間には自分だけの大切な「色」が宿っていました。隔離や強制などの窮屈な空間とは全くの別世界がありました。

家庭では、おじいちゃん、おばあちゃん、おとうさん、おかあさん、きょうだいたちとの空間が広がります。家族間のコミュニケーションがあり「家族間のルール」を学んでいきました。そして学校です。

私はこの「家族」「学校」「放課後」という3つの空間のなかで生活していましたが、さて、今の子どもたちにとって3つ目の放課後はどうなっているのでしょうか。

どうも3つの比がだいぶ様変わりしているような気がいたします。放課後がなにやらやせ細っているような・・・。放課後に占めるひとりの時間が多くなっているような気がいたします。ひとりの時間が多くなると「ひと」への心づかいなど、「ともだち」同士の中から生まれる自然なものだと思うのですが、相手の気持ちを察するころなどが育たなくなっているのではないかと心配なのです。思いやる心、やさしくしてあげる心、そっと寄り添ってあげる心など、友達であるからこそ育むことのできるものが、徐々に削り取られているような気がいたします。

また、自然とのふれ合いから学ぶものも大切であると思います。オタマジャクシから足が出てきた時の感動、朝露溢れる中を走りながら匂ってくる草花たちの息づかい、友だちと釣りへ出かけ、釣ったばかりのハゼを一刻も早く見せたくて家路を急いだこと。やっぱり、子どもには友だちがいて、自然がそのうしろで応援していることがとても似合うんですね。

いま、たしかに世の中はモノで溢れています。プレステ・サターン・スーファミ・ミニ四駆、遊びの主演は変化しつつあります。なぜか私にはその光景が寒々しく映り、ガラーンとした気持ちで包まれてしまいます。

子どもたちの「くらし」の変化、おとうさん、おかあさん、ぜひ思い出してみてください。昔のくらしは良かったなと思うようでは、もう年なののでしょうか、私はそうは思いません。嫌なことがあったとき、つらいことがあったとき、やっぱり思い出されるのは、海や山の景色、ひとの笑顔であつたり、思い出すことがあると思います。

海のような人、山のような人、やっぱりやさしさや思いやりを知らず知らずのうちに追いかけていませんか。辛いことがあったとき、勉強ができる人、成績の良い人を思ったりしませんよね。「元気のない人」は「たいせつな人」のとなりにいつもいたいものです。「元気のない人」は「安心できる人や自然」のとなりにいたいものです。

大自然は、やはりこどもたちの「くらし」に必要なと思うのです。くらしの中に大自然のような人・・・いますか？